

# 教育実習事前事後訓練プログラムの開発 (第Ⅰ報)

～授業観察訓練について～

南 部 昌 敏・小金井 正 巳

## 要 旨

大学における理論に関する教育と、教育実習における教育実践を結びつけることを目的とした教育実習の事前事後に位置づく、教育実習生の実践的能力を育成するための訓練プログラムの開発の基本的考え方を提案した。本プログラムは、①授業観察分析能力訓練、②授業設計能力訓練、③授業実施に関する教授スキル訓練の3つのサブプログラムによって構成されている。第Ⅰ報では、教育実習Ⅱ（観察参加）及び教育実習Ⅲ（普通教育実習Ⅰ）の実習効果を高めることを目的とした各段階の教育実習の事前事後に位置づく授業観察プログラムを開発し、実験的に試行した。本プログラムの第1段階は、学習を環境との情報の入出力関係で記述し、学習者の心的状態までも推測することを目的とした段階的な内容となっている。第2段階は、授業を教師と学習者との相互作用としての教授学習過程としてとらえ、プロトコール法及びカテゴリーシステムを用いた分析的アプローチを導入している。カテゴリー分析は、マイクロコンピュータの支援によるデータ収集及び処理が可能である。本プログラムを、2年次及び3年次生に対して実験的に試行した結果、実習生のアンケート調査により、有効に機能するプログラムであると判断した。

## KEY WORDS

Classroom observation

授業観察

Teaching practice

教育実習

## 1. は じ め に

近年、マイクロティーチング、授業シミュレーション等の新しい視点からの教育実習の見直しや教育実習効果を高めるための研究開発が行われてきた。坂元 (1977)、松下ら (1980)、小金井ら (1980)、近藤 (1980)、この背景として、1970年代の米国の教師教育改善の一つの基盤である CBTE (Competency-Based Teacher Education) の主張をあげることができる。Competency とは、教師がその職務を遂行するために必要な諸能力やそれらに関する教師の適性を意味するものであり、その育成を志向する CBTE とは、教育現場での教師の職務に関する行動をふまえ、教師としての適切かつ有効な諸能力の育成・習得を目指す、理論と実践の統合やそれらの諸能力の訓練を重視する教師教育であるということが出来る。したがって、CBTE のプログラムの開発には、教授能力 (teaching competency)、特に教授行動の訓練や解明が重要視され、主に情報科学、行動科学、教授心理学などを基盤とする教育工学的アプローチが重要な役割を果たしている。CBTE の主張には、これまでの教員養成大学・学部での教育が一種の教養主義を基盤とする完成教育として受けとめられる傾向が強く、基礎教育としての教員養成と生涯教育としての教員研修とを包括して考えるような方策の改善を教師教育という一貫した立

場から取り組む姿勢も見られる。これらの主張に基づき考えられる教師教育の課題として、大学で学んだ抽象的な理論や知見が教育実習に十分に生かされていないということが指摘されている。この点を改善するためには、単に教育実習の内容、方法を改善するだけでなく、大学・学部のカリキュラムや教員研修プログラムの中に、理論と実践とを統合するような過程を組み入れる必要があり、それらの中に、教師としての諸能力の基盤を培うような実質的な訓練や演習を組み入れる必要がある。

これらの課題に対する改善の動きとして、教員養成審議会の教育実習に関する専門委員会(1978)は、教育実習の問題を正面からとりあげ、教師が専門職としてふさわしい実践的能力と研究的態度は生涯にわたって継続的に向上がはかられるべきものであり、その基礎となる最低条件を充足しておくことが必要であるとした。また、ここでは、教師としての能力として、教授に関する実践的能力と教育実践に関する問題解決の研究的能力が提案されている。さらに、教育実習の方法として、「模擬授業、マイクロティーチング、シミュレーション等を用いて、指導の実践と技術に関する基礎的な認識や関心を高めるなど、教育工学的手法を積極的に導入する工夫も必要である」と提言している。

本研究は、CBTEの主張に基づき、大学において学んだ理論と教育実習における実践とを結びつけることを意図し、本学における1年次から4年次に開設されている教育実習の事前及び事後の教師としての実践的能力の訓練内容及び方法の開発をめざしたものである。

## 2. 研究の目的

上越教育大学の教育実習は、1年次から4年次にわたり、教育実習Ⅰ～Ⅶならびに専修教育実習に分かれ、段階的に開設されている。これらの実習の目的は、「(1)大学における教育・研究と教育現場の実践とを経験を通して組織化する。(2)学校教育の実際に触れ、教育実践を体系的・総合的に認識する。(3)専門的知識や技能を児童(園児)の発達を促すように適用する実践的能力を形成する。(4)研究問題を発見し、教育実践に関する創造的体験の場とする。(5)教員としての適性を高める努力の土台を形成する。」と規定されている。実習内容は、(1)学校教育の全体を経験する目的での実習。(2)既得の知識・技能を土台にして視点を定めての実習。(3)教師の活動の一端を分担し、役割を自覚する実習。(4)創意・工夫を実践の中で試行していく実習。と学年毎に深まるように設定されている。本研究では、これらの目的及び内容をふまえ、これらの教育実習における教育訓練がより効果的に行えるようにするための各教育実習の事前事後に位置付く教師の実践的能力の段階的な訓練プログラムの開発を意図している。開発のための具体的方略は次のとおりである。

(1) 教育実践を対象化する教育研究、すなわち、教育の中心的課題である授業の観察分析・設計・評価を通して、教育実習生の実践的能力を育成するための各教育実習の事前事後に位置付く訓練プログラムを開発する。

(2) 訓練内容を実践的能力の枠組から、①授業観察分析評価に関する訓練、②授業設計に関する訓練、③授業実施に関する教授スキル訓練の3つの枠に分け、プログラム開発を行う。これらの3つの内容はそれぞれが独立して存在するのではなく、各場面において相互にかかわりを持つ訓練プログラムとする。

(3) 各教育実習の目的、内容、方法を考慮し、それらをふまえた内容にするとともに、マイクロ・アプローチの考えに立ち、それぞれの事前事後において訓練目的・内容を明確化、焦点化し、実習生の実態を考慮した段階的な訓練プログラムとするとともに、自学自習システムとしての機能も持たせるようにする。

(4) 事前訓練で行う内容としては、その後にひかえる教育実習において必要とされる実習方法を想定し、訓練のために開発する授業実践場面に関する教材を用いて事前の訓練を行い、実習への課題を明確に持たせるようにする。

(5) 事後訓練で行う内容としては、その前に行った教育実習において得た情報を分析的アプローチを用いて検討させることにより、問題点の明確化とその後の大学での研究及び次の学習への課題を持たせるようにする。

(6) 以上のような方策を実行するために、授業シミュレーション、マイクロティーチング等の教育工学的手法を積極的に導入する。

(7) この訓練プログラムを、教育実習Ⅵ（教育工学実習）として位置付け、2年次～3年次にわたり、段階的に開設する。

第Ⅰ報では、上記のようなプログラム開発の目的及び方略に基づき、授業観察訓練を中心に報告することにする。

### 3. 授業観察訓練プログラムの開発

#### 3.1 マイクロ・アプローチの導入

教育実習及びその事前事後訓練に段階的に組み入れられる授業観察の手法について検討する。これまでに開発されている授業観察の手法としては、「各種評定尺度法」、「カテゴリーシステム」、「サインシステム」を始め、各種の現象学的手法に至るまで、さまざまな手法がある。しかし、これらの手法は、いずれも、ベテラン教師を対象とするものであり、また、それぞれの特徴とともにそれぞれ長所短所を持っている。一般に、これまでの教員養成では、これらのうちのどれか一つに焦点をしばって講義や演習で取り上げることはあったが、教授経験の乏しい学生にとって、これらを身につけることはかなりの労力を必要としていた。被訓練者の教授経験や教職に関する実践的能力の程度への配慮が乏しいのが実情であった。

また、観察対象である「授業」は、きわめて多くの因子を含み、それらが複雑にからみあった事象であるにもかかわらず、これまでの授業観察では授業全体を対象にしていたために教授経験の乏しい教育実習生には焦点がさだまらず、授業の特徴や問題点を明確に把握するまでには至らなかったのが実情であった。

そこで、本研究では、マイクロ・アプローチを授業観察訓練に導入することにした。マイクロ・アプローチによる授業観察訓練とは、これまで用いられてきた各種の授業観察の手法を訓練段階に合わせて改善するとともに、観察対象である授業から訓練目的に応じて重要と思われる授業分節を選定し、また、その段階における観察目標を小さくしばって実施するものである。このような手法はこれまでの授業観察の訓練手法には見られなかったものである。

### 3.2 教育実習Ⅱ（観察参加）の事前事後訓練を志向した授業観察訓練プログラムの開発

2年次に開設されている教育実習Ⅱ（観察参加）における授業観察の事前事後訓練を志向して、30時間の授業観察訓練プログラムを開発した。プログラム開発の具体的方策は次のとおりである。

(1) 学習者の行動を単独で観察するのではなく、常にその学習者を取り巻く環境とのかかわりの中で、情報の入出力関係に着目して観察できるようにさせる。

(2) 外面的行動観察だけでなく、その行動をおこした学習者の心的過程まで推測するような、内面的変容まで観察することができるようにする。そのために、段階的訓練内容・方法になるようにする。以上の具体的方策は M. D. Merrill (1968) の学習モデルの考え方を取り入れている。メリルは、広義の学習を学習者及び環境という二つのサブシステムの相互作用として受け止め、その学習過程における情報の流れを中心にモデル化をしている。このモデルは学習者を中心として構成されており、学習者への入力情報として、①刺激状況 (stimulus situation)、② KR 情報 (Knowledge of Results)、③ 自己受容 フィードバック (Proprioceptive feedback) の三つが示されている。それまでの学習のとりえ方が刺激—反応—KR の関係でとらえようとしてきたのに対して、自己受容フィードバックという考え方を導入しているところに特徴がある。この自己受容フィードバックとは、学習者がその刺激に反応（応答）したという意識であり、ときには自信を持って、またときには自信喪失、焦燥、不安、不満、自己嫌悪など不安定な心情のもとに反応応答していることを自ら意識することである。このような角度から学習というものをとらえることは、本学の2年次生の授業観察実習に対して有効に機能すると考えられる。

(3) 授業者の教授意図及び学習者の反応応答と自己受容フィードバックの推測を通して、観察・知覚・解釈判断・意思決定の一連の観察ができることを到達目標とし、それに向けて、教材の準備、場面の設定等を行う。

以上の基本的考え方に立ち、次のようなプログラムを開発した。(表1) また、授業観察記録の事例を表2に示す。

### 3.3 教育実習Ⅲ（普通教育実習Ⅰ）の事前事後訓練を志向した授業観察訓練プログラムの開発

3年次の教育実習Ⅲ（普通教育実習Ⅰ）が教壇実習を中心とした基礎的な授業設計及び授業実施に関する訓練を目的としているという点を考慮し、さらに、2年次の観察参加実習で習得した「学習」や「授業」を、学習者と環境との情報の入出力関係を相互のかかわりあいの中で分析的に観察するという視点をふまえ、教壇実習の事前事後に位置付く授業観察訓練プログラムを開発した。

プログラム開発の具体的方策は次のとおりである。

(1) 授業を教師と学習者との相互作用としての教授学習過程ととらえる立場で、教授行動及び学習行動をとらえ、プロトコル・アプローチを導入する。Cruickshank (1974) は、プロトコルを次のように定義している。

「プロトコルとは、教育過程で見られる教育上重要な意味を持つ事象の“原記録”で、教授学はもちろん、心理学、社会学、人類学、哲学等々を含めて、関連領域からの適切な概念を

用いて、その事象を解釈したり、問題を解決したりするのに利用されている」。

この方法が用いられるようになった背景としては、①授業そのものが多くの変数を持ち、その変数が複雑な関連を持って組み立てられている。そのため、教育実習生がただ漠然と授業を見ただけでは教授学習過程の要点や問題点を発見することはむずかしい。②授業行動は、それを観察している個々の時点で観察者の視野から瞬時に消え去るものである。それを単なる記憶やチェックリストから再現しても十分な分析・検討は困難である。③授業行動のような複雑かつ微妙で、しかも、視覚的要素が重要な意味を持つ行動を表現することに有効である。④ビデオカメラ、VTRの機能向上、低廉化および広範囲への普及、マイクロコンピュータの教育利用といったプロトコール・アプローチの技術的基盤がととのった。等が指摘できる。このように、再現性、反復性、保存性等の機能を持つプロトコールは、教壇実習の事前事後の授業観察訓練として、教育現場のベテラン教師の授業の観察から授業を支える要因を習得したり、自分の実習授業の問題点を発見したりする際に有効に機能すると考えられる。

(2) 授業者の教授意図及び学習者行動に対する授業者の知覚判断を推測させるとともに、教授学習行動をカテゴリーシステムを用いて分析し、授業の特徴を客観的なデータを用いて把握することができるようにする。

カテゴリーシステムとしては、南部ほか（1983）が開発した簡易授業分析カテゴリーシステム(SOCSIA)を用いることにした。本システムは、相互作用としての教授学習過程として授業をとらえる視点に立ち、特に発問過程の教授スキルの角度から分析的フィードバックが得られ

表1 教育実習Ⅱ（観察参加）の事前事後訓練を志向した授業観察訓練プログラム

| 訓 練 内 容   | コマ数 |
|---|-----|
| 1. 「学習」場面をそのときの環境との情報の入出力関係から記述する。メリルの学習モデルを用いてフィールドワークにより実習を行なう。   | 1   |
| 2. 「教育」場面をそのときの環境との情報の入出力関係から記述する。メリルの学習モデルを用いてフィールドワークにより実習を行なう。   | 1   |
| 3. 幼児の保育場面について「遊び」「保育活動」それぞれについてそのときの環境との情報の入出力関係から記述する。<br>メリルの学習モデル、シュトラッサーの教授概念モデルを用い、ビデオ教材を用いてグループ演習を行なう。       | 2   |
| 4. 児童の学習場面について、「遊び」「授業」「特別活動」それぞれについて、そのときの環境との情報の入出力関係から記述する。<br>メリルの学習モデル、シュトラッサーの教授概念モデルを用い、ビデオ教材を用いてグループ演習を行なう。 | 2   |
| 5. 国語科、社会科、算数科、理科の授業観察の視点と方法について、演習する。<br>附属小学校教官による講義及び演習を行なう。授業実践事例教材が使われる。                                       | 2   |
| 6. 2年次観察参加実習<br>演習課題「幼児・児童の言語的・非言語的行動の特徴を記述する。」   | 1   |
| 7. 幼児・児童の言語的・非言語的行動の特徴をまとめる。<br>小学校、幼稚園での記述情報をグループで交換し合い、まとめる。  | 1   |

表2 授業観察記録の事例

## 授業観察記録表

昭和60年6月18日

授業名 植物の成長とつくり(5年理科) 授業者 H. A

記録者 学籍番号 59--- 氏名 K. O

| 時 | はたらきかけ                    | 対 応 策 | 教授意図                   | 反 応・応 答                      | 自己受容F B                   | 解釈判断・意思決定                   |
|---|---------------------------|-------|------------------------|------------------------------|---------------------------|-----------------------------|
|   | たねの発芽に必要な条件は何ですか。         |       | 発芽の条件を確認する。            | 水、空気、適当な温度等                  | 思い出しながらも、自信を持って発言している。    | 発芽の条件を反対の立場からもういちど確認してみよう。  |
|   | では、必要でなかったものは？            |       |                        | 日光、土                         |                           |                             |
|   | では、なぜ必要ないとわかりますか？         |       |                        | ロッカーの中や脱脂綿でも育ったから            |                           |                             |
|   | では、植物が成長するには、何が必要だと思いますか？ |       | 植物の成長の条件を発芽をヒントに考えさせる。 | 水、空気、適当な温度は絶対に必要だ。           |                           |                             |
|   | では、日光は？                   |       |                        | 一人を除いて、絶対に必要という。             | 一人でもたいして気にしていない。          |                             |
|   | なぜですか？                    |       |                        | ロッカーの中でも芽が出たし、実験してみないとわからない。 | しかし、先生に指名されると少し、困ったようである。 | 一人でも疑問に思っていれば実験で確かめることにしよう。 |
|   | では、日光のことも実験して見ましょう。       |       |                        |                              |                           |                             |

以 下 略

る機能を持っている。カテゴリー数も少なく、教育実習生にも容易に活用することができるものである。また、カテゴリカルデータの収集及び処理を迅速に行うために、マイクロコンピュータを用いた授業観察支援システムの開発もあわせて行った。

以上の基本的考え方に立ち、次のような事前及び事後訓練プログラムを開発した(表3)。

### 3.4 カテゴリー分析によるマイクロコンピュータを用いた授業観察支援システムの開発

本システムは、利用者の目的やレベルに応じて、次のようなコースを用意している。

#### (1) 授業観察データ直接入力コース

授業会場へハンドヘルドコンピュータを持ち込み、授業実施の流れに合わせて、その場でカテゴリカルデータ(行動カテゴリーと出現経過時間)を入力する。授業終了後、処理用コンピュータにデータを転送し、必要な処理を行う。授業ビデオを再生視聴しながらでも可能である。

表3 教罪実習Ⅲの事前事後訓練を志向した授業観察訓練プログラム

| 段 階    | 訓 練 内 容  | コマ数 |
|--------|--|-----|
| 事前訓練   | 授業の導入段階について、プロトコールを作成し、教授行動と学習者行動を簡易授業分析カテゴリー (SOCSIA) を用いて、データ化し、コンピュータ分析を行なう。<br>ベテラン教師のモデル的授業場面のビデオ教材を用いて、グループ演習を行なう。   | 5   |
| 実習への課題 | 自分の教育実習授業をビデオ録画し、プロトコールを作成する。<br>(各自で行なう)  |     |
| 事後訓練   | 自分の教育実習授業を教授意図、学習者行動の判断についてふりかえることにより、授業設計及び教授行動の適切性について分析的に評価する。<br>1. 教授方略、目標の設定、学習者の特性分析、教材、教授メディアの選択等について<br>2. 情報提示、学習者への対応行動について<br>カテゴリー分析による授業観察支援システムを用いて、授業全体を分節にわけて、分析的に評価する。 | 10  |

この方法は、授業終了後、短時間で処理結果が得られる利点があるが、直接、データ入力ができるようになるためには若干の訓練を要する。また、判断ミスによる誤入力が多少なりとも出現してしまう。しかし、この場合は、データの修正モードが用意されており、簡単になおすことができる。

#### (2) 授業観察データ吟味検討入力コース

記述形式プロトコール及び教授意図・学習者行動判断結果記入表を用い、各行動の内容を十分に検討し、カテゴリー化した上でデータシートを作成し、コンピューターに入力する。(1)に比べ、処理結果を得るまでにかかなりの時間を要するが、カテゴリー分析の経験のない教育実習生にも行うことができる。また、データが十分検討されているため、データへの信頼性は高い。

#### (3) 任意カテゴリー設定入力コース

利用者の用意した任意のカテゴリーをシステムに登録し、それに基づくデータ処理を行うことができる。教育実習生に対しては、4年次生の応用実習等において自学自習形態での利用が考えられる。

本システムのデータ処理のメニューとして、次の5つの表示メニューが用意されている。

1. 時系列グラフ表示
2. カテゴリー集計表表示
3. データ表示
4. 前後関係マトリックス表示
5. 多重遷移過程表示

なお、上記の表示メニューの他、次の機能メニューも用意されている。

1. 印刷開始、印刷終了モード
2. 時間指定モード

時間指定モードを用いることにより、授業全体の一連のデータの中から、必要な分節をぬきとって処理を行うことができるようになっている。

次にマイクロコンピュータシステムを示す(図1)。

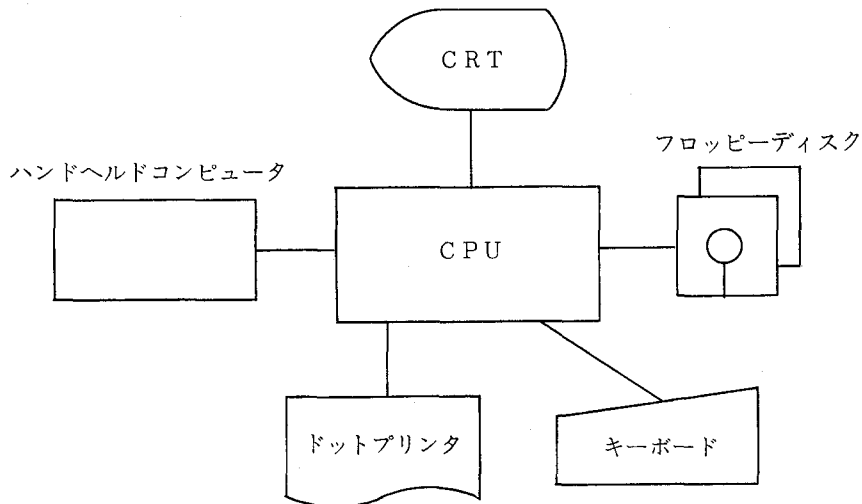


図1 授業観察支援システムのハードウェア構成

本システムは、富士通のFMシリーズ及び、NECのPC8801, 9801シリーズで動作するようになっている。

#### 4. 実験的試行とアンケート調査結果

##### 4.1 教育実習Ⅱの事前事後訓練

昭和60年度1学期に開設された2年次生対象の教育実習Ⅵ(教育工学実習)において実験的に試行した。

本プログラムの内容及び方法について、特に次の2点について、受講生に対するアンケート調査を行った。

1. 観察記述方法の効果について
2. 自己受容フィードバックについて

その結果を示す。(図2, 表4)

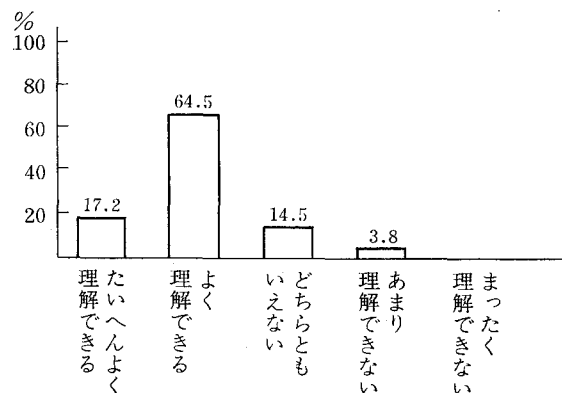


図2 観察記述方法の効果(授業, 学習, 幼児, 児童の生活のようすの理解について)



表4 自己受容フィードバックを考えてみて感じたこと  
(学部2年次学生188名中3名以上が記述した内容)

|   |     |
|---|-----|
| 1. こどもの立場、レベルに自分を置くことができたようになった。……………                   | 24人 |
| 2. こどもの心の中を読むことができたようになった。……………                         | 16  |
| 3. 児童の内面を考える習慣をつけることができたようになった。……………                    | 12  |
| 4. こどもの考えについて予想がつくようになった。……………                          | 8   |
| 5. 児童理解の一つになった。……………                                    | 6   |
| 6. こどもを見る目が以前より細かく、かつ、深くなった。……………                       | 5   |
| 7. こどものところをよく観察できるようになった。……………                          | 5   |
| 8. こどもたちのしぐさ、表情からこどもたちの考えを読み取ることができるようになった。……………        | 5   |
| 9. こどもの心の中の反応が見られるようになった。……………                          | 4   |
| 10. こどもの気持ちの変化が理解できるようになった。……………                        | 4   |
| 11. こどもの心理状態、反応、影響がわかり、よって、教師のつぎの対応の仕方が見られるようになった。…………… | 4   |
| 12. 場面場面の中でいろいろ変化することどもの感情を考えられるようになった。……………            | 3   |
| 13. こどもの内面を推測する必要がよくわかった。……………                          | 3   |
| 14. こどもの内面や、さまざまな行動のつながりについて観察することができた。……………            | 3   |
| 15. こどもの次の行動が推測でき、それによって教師側の対応の仕方もかわることがわかった。……………      | 3   |

#### 4.2 教育実習Ⅲの事前事後訓練

事前訓練は、昭和60年3月11日～14日に集中実習形式で、昭和58年度入学生を対象に行った。また、事後訓練は、昭和60年7月1～2日、事前訓練と同じ教育実習生を対象に教育実習Ⅲの実習の直後に行った。

本プログラムの内容及び方法について、特に次の4点について受講生に対するアンケート調査を行った。

1. 自分の授業を録画視聴したことについて（図3）
2. プロトコルを用いたことについて（図4）
3. カテゴリー分析をし、コンピュータ処理をしたことについて（図5）
4. 教授意図・学習者行動分析について（図6）

#### 5. 考察と今後の課題

前述のアンケート調査結果に基づき、本プログラムの有効性を検討する。

教育実習Ⅱ（観察参加）の事前事後訓練では、学習者の行動の特徴を把握させることを目的として、①学習者と環境との情報の入出力関係で記述する方法、②学習者の心的状況まで推測させる方法の2つを組み入れた。図2からもわかるように、このような観察記述手法は、授業場面、学習場面及び幼児・児童の生活場面における特徴を把握するために有効に機能している

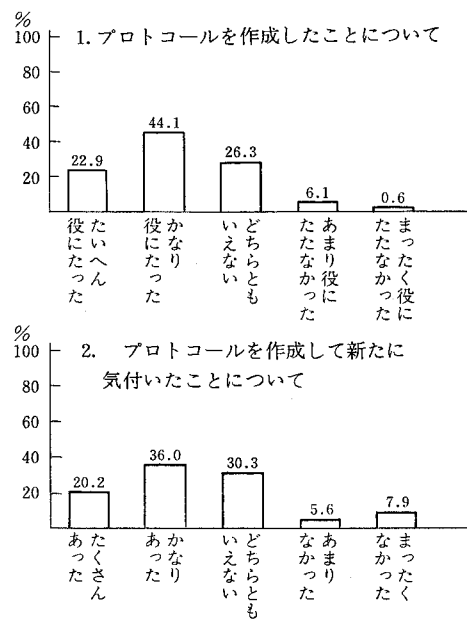
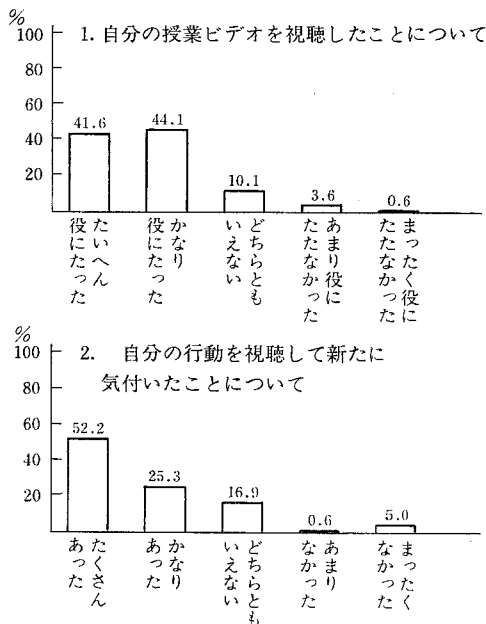


図3 自分の授業を録画し、視聴したことについて 図4 プロトコルを用いたことについて

ことがうかがえる。また、表3からもわかるように、自己受容フィードバックの状況まで推測させたことにより、これまで教育実習生自身が持っていた幼児・児童を観察する視点とは別の角度から観察する意義を教育実習生に植え付けることができたと判断できる。教師としていしばん悲しいことは、子どもがなぜそのような行動をするのかその理由が理解できないことである。教員養成の初期の段階において、教壇における授業実習を行う前にこのような子どもの心の中まで推測する経験を与えることの意義は大きいと考えられる。

教育実習Ⅲの授業観察に関する事前事後訓練では、観察する授業からその特徴を客観的なデータに基づき抽出し、それを自分の授業実習に活用することができるようにするとともに、自分の授業を客観的に分析的手法を用いて問題点の解明をすることができるようにすることを目的としている。そのために、①ビデオの鏡的利用によるビデオフィードバック、②プロトコルアプローチによる授業行動の細部にわたる検討、③教師と学習との相互作用としての教授学習過程における発問過程の教授スキルの習得をめざしたカテゴリーシステムによる教授学習過程の分析検討の3点を組み入れた。これまでの授業実習では、授業実習をしても特に印象に残る場面は記憶に残るがあとはすべて瞬時に消えてしまい、また、指導教官からの適切な助言指導があったとしても、その視点のみであって授業実習のかなりたくさんの貴重な情報がすてられていたと見ることができる。それに対する1つの手だてとして、授業をビデオ録画することによって得られるビデオフィードバック情報がいかにたくさんの貴重な示唆を授業者に与えてくれるかということを図3の調査結果は物語っているといえる。さらに、ビデオ録画をもとにした記述形式プロトコル作成の作業についても同様に見ることができる。さらに、マイクロコンピュータを利用した教授学習過程のカテゴリー分析である。これまでの分析は、観察者の教育観に基づき、その観察者の視点から授業の特徴を議論してきた。これでは、観察者の価値観の違いによってデータの収集も左右されることになってしまう。そこで、データの収集に際

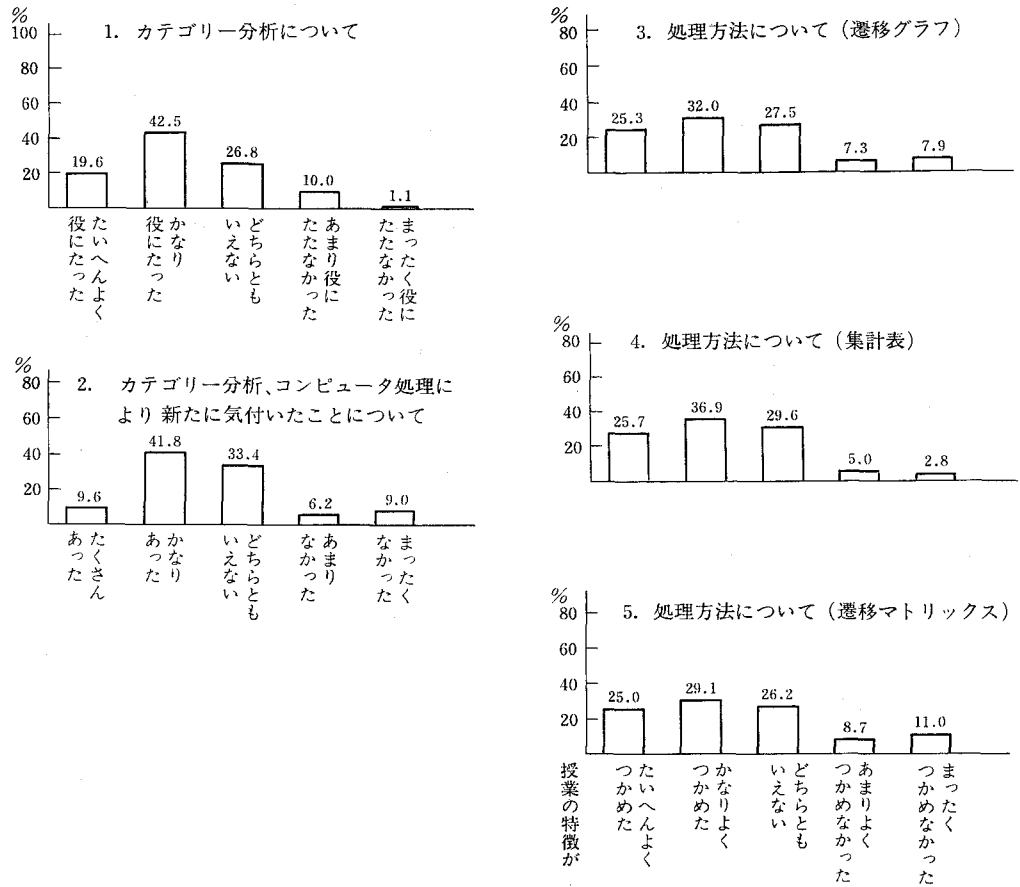


図5 カテゴリー分析・コンピュータ処理をしたことについて

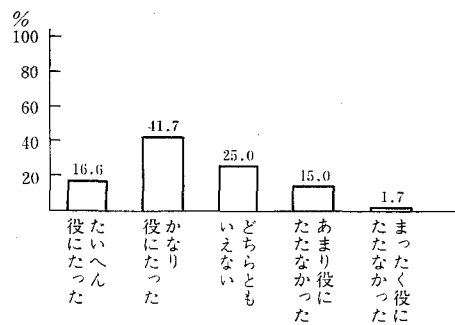


図6 教授意図・学習者行動判断分析について

しては、共通の土俵で行うこととし、得られたデータの解釈はそれぞれの考え方に立ち行うこととすれば、教育実習生自身に対しても、より有効な授業改善の情報が提供できると考えられる。図5からもカテゴリーシステムは好意的に受けとめられているとみることもできる。図6の回答結果にも同様の結果が見られる。しかし、本システムは、授業観察のみを訓練しても意味がない。そこで、授業設計、教授スキル訓練と統合的に考えられるようなシステムの開発が期待されており、今後の課題としたい。

なお、本研究の一部は、昭和59、60年度文部省科学研究費試験研究(1)(課題番号59880023、代表小金井正巳)の助成を受けた。

### 参 考 文 献

- Cruikshank, D. R. (1974) The protocol materials movement: on exemplar of effects to Wed Theory and practice in teacher education. *Journal of Teacher Educaiton*, 25(4): 300-311
- 木戸章夫(1973)アメリカにおける教師養成教育改善の動向. 九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設紀要, 24: 91-111
- 小金井正巳(1977)教師教育と教育工学(その1)教師の諸能力の改善に関する研究開発. 日本教育工学雑誌, 2(4): 161-170
- 小金井正巳ほか(1980)マイクロティーチングによる教育実習プログラムの開発と評価. 日本教育工学雑誌, 4(3): 113-126
- 近藤勲(1980)教材開発をくみこんだ模擬授業とその評価法. 日本教育工学雑誌, 4(3): 85-96
- 松下文夫ほか(1980)教育実習改善のための試行一実習効果を向上させるための訓練型の提案一日本教育工学雑誌, 4(3): 103-112
- Merrille, M. D. (1968) Components of a cybernetic instructional system. *Educational Technology* 8(7): 5-10
- 文部省教育職員養成審議会教育実習に関する専門委員会(1978)教育実習の改善充実について. 東京
- 南部昌敏ほか(1983)簡易授業分析用カテゴリーシステムの開発とそれによる教育実習生訓練の試み. 日本教科教育学会誌, 8(2): 73-80
- 坂元昂ほか(1977)簡易型マイクロティーチングにおけるフィードバック および評価作業の効果. 日本教育工学雑誌, 2(3): 81-92

# Development of pre- and post-Training Programmes for Teaching Practices

Masatoshi NAMBU and Masami KOGANEI

## SUMMARY

In the present paper, we report that we have developed a pre- and post-training programmes for classroom observation in student teaching. This programmes have two courses. In one course, student teachers learn and receive training about a method of classroom observation for describing the interaction between learner and circumstances. In the other course, student teachers learn and receive training about a analytic method of classroom observation by a category system (SOCSIA) and video protocols.

In our tryout it is found that this programmes is available for training of classroom observation for student teachers.